隠岐島前高校郷土部収録

海士町の民話から(37)

■再話・解説
酒井董美（ただよし）
（山陰民俗学会会長、
元隠岐島前高校郷土部顧問）

ネズミ浄土

語り手…石原 サイさん（北分、明治27年生まれ）

とんとん昔があったげな。

おじいさんとおばあさんんがあってね、大きな大きな握り飯を五つこしらえて、木こりに行ったそうな。ほいで昼になったから、二つずつ食べてね、一人前で　そいで腹が張ったから、一つを残して、

「おじいさん食べ」

「おばあさん食べ」言っているうちに、コロコロとくどれて（転がって）。そこにね、ネズミの穴があった。そこへ転がり落ちたそうな。

そいで今度、その下にネズミがおってけぇ、大きな握り飯だから、ネズミがみんなで追わえてけぇ、そっから、上へ出て行き、

「おばあさん、おじいさん、とてもご馳走だった。大きな握り飯で腹が張ってとてもよかったから、なんにもないけんど、今までわれわれがあっちからこっちからひいて帰って来たこの宝物あげっから持って帰んなさい」言って、そのおじいさんおばあさんは喜んで持って帰ってね、そっから隣のおじいさんおばあさんが、また欲なおじいさんおばあさんで、その話聞いて、

「そんならわれわれも行きて、宝物をもらおう」ちゅうことで、自分らが食べるものは持たずに、こまい（小さい）握り飯を一つ持って行きて、穴を聞いて来たから、その穴に投げこんでやったら、いまだネズミが出て来て、

「よくもわれわれをだましたな。こないだの宝物をみな返してくれ」て、大勢ネズミが寄ってたかって…、おじいさんもおばあさんも噛み殺したそうな。

そげな話があったげな。

■収録：昭和52年5月6日
■聞き手：上谷千代美　宇野多恵子
上田和代　吉本千恵子　酒井董美

【解説】関 敬吾『日本昔話大成』では、本格昔話の「隣の爺」の中に「鼠浄土」として登録されている話型である。ただ隠岐地方では、余った握り飯を爺と婆で譲り合う部分のあるところが特色であり、本土に残されている同類には、この部分はない。隠岐人の優しさがこのような語りを生み出したのかも知れない。他の方の語りでは握り飯ではなく焼き飯とする場合が多い。また、隣人が失敗するのは昔話の定番であろう。

イラスト／福本隆男（崎出身、三郷市在住）